

歌おう 反核の詩

広島原爆を描いた漫画「はだしのゲン」で知られる漫画家、故中沢啓治さん(2012年に73歳で死去)の詩「広島 愛の川」に、作詞作曲家の山本加津彦さん(34)が曲を書き、歌手の加藤登紀子さん(70)が歌うことになった。シャンソンが好きだった中沢さんのために妻ミサヨさん(71)が望み、登紀子さんも「中沢さんが残した唯一の詩。大事にしたい」と引き受けた。原爆への怒りと世界平和への思いを込めて、今夏からステージで歌い継がれる。【松本博子】

きっかけは、AKB 6月で「広島 愛の川」の2部を目にしたことだった。愛する我が子に頼ず

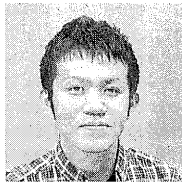
「広島 愛の川」(一番のみ)
愛を浮かべて 川流れ
水の都の広島で
語ろうよ川に向って
怒り、悲しみ、優しさを
あ、川は 広島の川は
世界の海へ流れ行く

姿川面に写す日々
誓おうよ川に向って
怒り、悲しみ、優しさを (三番)
メロディーが浮かび、曲を作りたいと思った。だが、ためらいもあった。「大阪出身だし、親戚に被爆者がいるわけでもない。作

中沢啓治さん「広島 愛の川」 34歳作曲家と加藤登紀子さん協力



「はだしのゲン」を加藤登紀子さん(左)に贈る中沢ミサヨさん—東京都千代田区で昨年10月、西本勝撮影



山本加津彦さん

っていいの……」小学校で読んだ「ゲン」を読み返し、内容の深さに改めて感動した。ミサヨさんに手紙を出し、詩の全文を見せてもらった。詩は晩

「詩」と手を加えずに作ることを提案した。ミサヨさんは「原爆に高い声は合わない。低い声で一言一言、かみしめるように歌ってもらいたい」と、中沢さんが好きだった登紀子さんに歌ってほしいとの希望を伝えた。

山本さんは、中沢さんの生家や避難先であった広島市の街を歩き、構想を練った。8月6日も広島で過ごし、曲を完成させた。曲を聴いた登紀子さんは「いい歌。歌は生まれるべくして生まれる」と歌うことを快諾した。

ミサヨさんは昨年10月、東京で登紀子さんに初めて会い、「ゲン」全10巻を贈った。12月にも3人が顔を合わせ、夫のいない寂しさをにじませるミサヨさんを、登紀子さんが「人の命は短くても、残したい思いが強ければ残っていく。歌が思いを」と期待している。

つないでくれる」と励ました。一周忌に当たる12月19日には、今夏発売予定のCDの試聴版が広島市のミサヨさん宅に届いた。それを聴きながらミサヨさんは「ゲンが連れてきた人たちに助けてもらっているよ」と遺影の夫に話しかけた。

登紀子さんは生前の中沢さんと面識はなかったが、広島と長崎で二度被爆した故山口彊さんの記録映画「二重被爆」語り部山口彊の遺言「で歌と語りを担当した。詩について「ゲンのような激しいイメージはないが、そこは私の歌で表現したい。『優しさ』も怒りのよ」と受けとめた。

ミサヨさんは「広島から世界に平和を届けたいという夫の願いを、若い作曲家の感性と登紀子さんの声で、多くの人に届けてほしい」と期待している。